

【特集】東日本大震災 ～被災地における支援活動の体験～

5. 東日本大震災における学生ボランティア活動の教育的意義

茶屋道 拓哉¹⁾ 筒井 睦²⁾

¹⁾ 九州看護福祉大学看護福祉学部社会福祉学科、²⁾ 九州看護福祉大学看護福祉学部口腔保健学科

【要 旨】 筆者らは、東日本大震災における学生ボランティア活動の引率教員として、2011年8月23日～29日の7日間にわたり、福島県いわき市を訪れた。本稿では、そこでの学生ボランティア活動の実際を振り返り、学びの場としてのボランティア活動に対する教育的な意義付けを行うことを目的としている。ボランティア活動は、①被災地の視察、②移動販売事業、③現況調査（傾聴ボランティア）、④現地学生との交流、⑤サロン事業への協力、⑥ケアイベントの企画と実施を中心に行われた。それぞれの活動を学生たちの「語り」から振り返る中で、学生たちは「事象の背景を捉える」「気遣い・気懸りを持つ」「生活の再構築に対する気づき」など、対人援助職の基盤となりうる重要な要素に触れていたことが明らかになった。また、被災地からだけの学びではなく、集団での共同生活からチームワークを生み出し、不慣れな土地でも協力して対象者に関わっていく力動を生み出していた。ボランティア終了後に、学生たちの体験を語り下ろし、体験を伝えていく必要性と同時に、昨今議論されているボランティア活動の単位化について十分な検討の場と評価基準の必要性について述べている。

キーワード： 災害ボランティア ボランティア教育 事象の背景 生活の再構築

緒言

2011年3月11日14時46分に発生した「東北地方太平洋沖地震」（最大震度：震度7、マグニチュード：9.0）と、それに伴う津波や原発事故など様々な自然災害を包括する意味での「東日本大震災」は、多くの生命、文化、歴史を一瞬にして奪い、人々の生活を一変させた（全国における被害状況：死者15,841人、行方不明者3,485人、建物全壊126,348棟、建物半壊227,453棟）¹⁾。また、それだけにとどまらず、人の生き方や価値観そのものを根底から変えるような、新たな生活基準の胎動すら生み出した。

筆者らは、この東日本大震災を受けて、学生と共に、福島県いわき市（図1）でのボランティア活動を実践した（2011年8月23日～29日）。その活動記録を中心に教育的意義の観点から小括を加えることで、学生らの成長と気づきを共有する機会とし、今後の継続的活動に向けた一助とすることを目的としたい。



図1 福島県いわき市の位置

I. 福島県いわき市の概要と被災状況

福島県は、太平洋と阿武隈高地にはさまれた「浜通り」、阿武隈高地と奥羽山脈にはさまれた「中通り」、奥羽山脈と越後山脈にはさまれた日本海側の「会津」の3地域に分けられる。いわき市は福島県の東南端「浜通り」に位置し、茨城県との県境にある。人口は342,198人で、福島県内

Educational meaning of the student volunteer activity in the Great East Japan Earthquake.Takuya Chayamichi¹⁾.Mutsumi Tsutsui²⁾

¹⁾Kyushu university of nursing and social welfare, faculty of nursing and welfare, department of social welfare,

²⁾Kyushu university of nursing and social welfare, faculty of nursing and welfare, department of oral health Sciences

第1位の人口規模になっている（郡山市：338,772人、福島市292,280人）²⁾。東北地方にあって、比較的穏やかな気候であり、山間部を除いては積雪もあまり見られないという。高度経済成長期までは常磐炭田を中心に栄えた都市であった。しかし、エネルギー革命以降、その様相は一変している。炭鉱業の斜陽化による地域経済の停滞を「常磐リゾートハワイアンズ（現：スパリゾートハワイアンズ）」に代表されるような観光業で復興させるなど、時代と社会に応じた地域づくりがなされてきている。

なお、東北地方太平洋沖地震による、いわき市の地震と被害状況は以下の通りである³⁾。

【警報等発表状況】

3月11日 14：46 震度6弱

4月11日 17：16 震度6弱

4月12日 14：07 震度6弱

9月29日 19：05 震度5強

【人的被害の状況】

死者 310人（うち4月11日余震による者3人）

行方不明者 38人

重傷者 3人（4月11日余震による）

軽傷者 1人（4月11日余震による）

【住家被害の状況】

全壊 7,590棟

半壊 29,187棟

一部破損 41,298棟

Ⅱ. ボランティア活動のための事前準備

1. ボランティア団体等との連携と情報交換

本ボランティア活動を行うに当たっては各方面の協力を得た。まず、「NPO法人れんげ国際ボランティア協会」の久家事務局長により、ボランティア活動を行うに当たっての情報提供、関係調整などが行われた。同法人は、東北地方太平洋沖地震直後より、いわき市での炊き出し活動などを通じて現地ネットワークを有しており、現地のボランティア活動に対するニーズ等の状況に詳しくあった。久家氏の紹介により、いわき市でのコーディネート「NPO法人ザ・ピープル」が運営委託を受けた「いわき市小名浜地区復興支援ボラ

ンティアセンター」の吉田センター長にお願いすることとなった。

筆者らは久家氏と共に、ボランティア活動におけるプログラム検討を事前に行った。それらは単なるボランティア活動にとどまらず「学ぶ機会」や「被災地における教育プログラムの側面」を考慮した内容となった。

2. 本学における準備

ボランティア活動の実施にあたっては、二塚学長を中心にプロジェクトチームが生まれ、対応がなされた。また、事前に齋田保健管理センター長による学生への問診や被災地活動における注意点の指導、専門職として団体や個人で被災地入りした経験のある看護学科（中川専任講師）や鍼灸スポーツ学科（田口専任講師）の教員からの情報提供やアドバイスを頂いた。

3. 事前視察

学生ボランティアの派遣に先立って、筆者は久家氏と共に3日間の日程で現地を訪れた。小名浜地区復興支援ボランティアセンターを訪問し、ボランティアのニーズ等の状況を伺うとともに、先に述べた「学ぶ機会」や「被災地における教育プログラムの側面」に対する理解と協力を得るための調整を行った。さらに、いくつかの活動先を実際に巡回し、事前の打ち合わせを行ったり、学生の滞在する宿舎に実際に泊まるなど、得られる情報を極力得るようにした。

大学に戻り、現地の状況などを事前に学生に周知することで、学生の不安感の軽減につなげた。

Ⅲ. ボランティア活動（プログラム）の実際と学生の内面的成長に焦点を当てた振り返り

ここでは、実際のボランティア活動について時系列に示し、そこでの学生の「語り」（ボランティア活動期間中の活動記録）を記し、小括を加えることで、学生の内面的成長について検討したい。

1. 8月23日（火） 移動日

10：10 熊本空港発

- 11:45 羽田空港着
羽田空港→東京駅
東京駅(高速バス)→いわき駅
いわき駅(レンタカー)→湯の岳山荘
18:00 湯の岳山荘
19:30~20:00 講義:「いわき市の概要と歴史」
講師:松崎 和敬氏

初日は移動に多くの時間を費やした。学生はいわき市に到着してからすぐ、適度な緊張感を持ち、地域や人々の様子を観察していた。例えば、いわき駅の日常と変わらない様子や、食料品の買い出し時における県産品の販売のされ方や、それを購入する消費者の姿、宿舎への移動の車窓から見られた震災の爪痕など、一つひとつを丁寧に観察しながら、学生なりに解釈し、今後どのような対応をとっていくことが必要であるかを考えている様子がうかがえた。

2. 8月24日(水) レクチャー・現地視察
9:30 小名浜地区復興支援ボランティアセンター
10:00~11:30 講義:「震災の状況とNPO及び復興支援ボランティアセンターの対応」
講師:吉田恵美子氏
11:30~12:30 昼食:被災者雇用による弁当事業の弁当
12:30~15:00 被災地視察:小名浜~永崎~江名~豊間~薄磯~四倉~久之浜
15:00~16:00 講義:「道の駅四倉港復興に向けた取り組み」
講師:小松英昭氏
17:00 小名浜地区復興支援ボランティアセンター
18:30 湯の岳山荘

2日目から本格的な活動が始まった。ここでは被災地の現状と取り組みを学ぶために、小名浜地区復興支援ボランティアセンターの取り組みの紹介を受け、被災地(津波による甚大な被害を受けた地域)の視察(図2)、4メートルを超える津波が襲った「道の駅四倉港」の復興に向けた取り組みなどをうかがった。

被災地の視察については「3.11から東北は確実に

に前に進んでいて、震災当時とは違うということである。確かにまだ瓦礫の撤去作業や片付けなど終わっていないところはたくさんあると思うが、同時にこれから先のためのことを考えなければいけないのだと感じた」「(様々な状況を目の当たりにして)こんなことが日本で起こっているのだと思った。普通に暮らせていることが一番幸せなんだと改めて感じた」「津波の威力のすごさを目の当たりにし、言葉が出なかった。何とも言えない」など、メディアを通して客観的にしか知ることのできなかった現状を、体感する(主観的になる)ことで、自分の日常生活と重ね合わせて、被災された方々に想いを馳せることが出来ていた。さらに、「テレビを通して見るのと、実際にその土地に行ってみて、感じるものは全く違うと思った。街中は賑わっているし、移動中にも家の修理をしたり、瓦礫の撤去作業をしたり、お店をやっていたりと、立ち上がる力のすごさを感じた」や「まだまだ震災の爪痕は残っていた。メディアで流れている情報では伝わりきれない独特の雰囲気を感じた。実際に見てみても本当に起こったのかと信じきれない部分があった。それに対し、起こってしまった震災を受け止め、前を向いて仲間とともに支えあって活動されている方々の力強さ、思いの強さをすごく感じた。全員が被災者で辛いし、きついはずなのに、笑顔で懸命で…。仲間の大切さを感じた」に表されるように、学生たちは、極限的な状況におかれた人々の立ち上がる強さを知ると同時に(一方で、バーンアウトへの気懸りも必要になってくる視点ではあるが)、その被災地で主に活動する方々の多くが「被災者でありながら支援者でもある」という二つの側面を抱えながら活動していることへの気づきも見られた。この気づきの延長線上に専門職としての「支援者支援」の視点^{*1}が生まれてくるといえる。

事象の背景に目を向ける視点も養われた。例えば「家や幼稚園が津波で倒壊して、土台だけになっているのを見た。そこに一つひとつの家庭や思い出があるのを感じた。当たり前にあったものがすべてなくなった心情は経験しなければわからないと思うが、私なりに考えて、傾聴ボランティアに臨んでいきたい」や「家が建っていた跡や

『解体可』と書かれた家が印象に残っている。実際にその状況を見ると『数か月前まで何事もなく住んでいたのに』とひしひしと感じた。胸が痛いというか、言葉では言えない気持ちになった」などに見られる語りからは、「事象の背景」を捉える視点が垣間見えた。この視点は、クライアントをエコロジカルなパースペクティブで捉えていく際に必要とされる「生活時間（ライフ・コース）」の概念^{※2}に見いだされる。さらに言うまでもなく、こういった事象の背景へのある種の「気遣い・気懸り」は対人援助専門職の根底にある／なくてはならない「ケア概念」^{※3}に収斂されよう。



図2 被災地視察の様子（いわき市久之浜地区）

3. 8月25日（木） 移動販売事業・被災者現況調査ボランティア

8:40 平スカイストア

9:00 仮設住宅への移動販売事業概要の説明

講師：芳賀克彦氏

9:30～12:00 販売品目の選定・積み込み、移動販売車同行、販売ボランティア（中央台高久仮設住宅）

12:30 昼食：平スカイストア

13:30 現況調査（傾聴ボランティア）の説明：小名浜地区復興支援ボランティアセンター

14:30～17:00 被災地域（栄町・下神白・永崎・中之作・江名）での現況調査の実施

17:30 小名浜地区復興支援ボランティアセンター

18:30 湯の岳山荘

4. 8月26日（金） 被災者現況調査ボランティア（大雨のため一部日程変更）

9:00 小名浜地区復興支援ボランティアセンター

10:00～11:30 講義：「サロン活動について」

講師：篠原洋貴氏

13:00～14:00 被災地域での現況調査の実施

14:00～15:00 見学：アクアマリン福島

15:00～16:00 現況調査結果報告：小名浜地区復興支援ボランティアセンター

18:00 湯の岳山荘

移動販売は仮設住宅へ転居してきた被災者の方々の日常生活を支える重要な社会資源となっている。「平スカイストア」では、いわき市の買物支援事業の委託を受け、いわき市内の4か所（仮設住宅や被災者の入居する雇用促進住宅）でそれぞれ週に2回の移動販売を行っていた。筆者らが移動販売に関する活動を行ったいわき市にある中央台高久仮設住宅（広野町や楢葉町からの入居者が多い）は、これから新興住宅地を作っていくために造成されていた土地に、急遽設けられたものである。それ故、近隣に食料品などを購入できる施設がなく、車を持たない高齢の入居者や、震災により車を失った入居者の方々の日常生活を支えている。学生らは、平スカイストアの担当者の指導の下、地域のニーズに合わせた販売品の選定と確認、積み込み、現地での仮設店舗の設置、利用者の呼び込み、販売、撤収作業を担った（図3）。中には、仮設住宅に住む子どもたちと自然な雰囲気の中で遊びを共有する学生もいた。

そのような中で学生たちは「移動販売は、利用者が少ないと感じたものの、その方々のために動くことの必要性を利用する方の姿やスタッフから学んだ」「移動販売の時に、仮設住宅の子どもたちと接する機会があったが、『子どもが子どもらしくしない』ことに気付いた。観察すると『自己主張しない』ということに気付いた。『自分を殺している』と感じてショックを受けた」「（移動販売時）被災された方々とふれあう機会があった。そこでは新しい人間関係がしっかりとできていた。地震・津波・原発事故により、これまでの生活や関係性は壊れてしまった。買い物をするという事一つをとっても、その途上では困難さがあることを知った」などに表されるように、単に販売

をするというだけではなく、その必要性や仮設住宅に流れる微妙な空気感を学生たちなりに察知していたことが分かる。

被災地の現況調査（傾聴ボランティア）については、事前のオリエンテーションを復興支援ボランティアセンターより行っていただいた。学生と教員併せて10名を2名ずつの5グループに編成し（教員1名は随時各地を巡回）、復興支援ボランティアセンターのボランティアスタッフとしていわき市小名浜地区の各地（栄町・下神白・永崎・中之作・江名）を訪れた。現況調査の調査項目は、基本属性（氏名、年齢、家族構成）の他に、住宅の被害状況や困っていること、要望など、緊急度を把握しながら調査用紙に記入していった（図4）。

ボランティア活動を行う学生に限らず、多くの対人援助職を目指す学生は、これまでの教育課程や日常生活の中で、「読む」「話す」「書く」については、一定の訓練を受けてきていると言える。一方、よほど注視しない限り、「聴く」ということについては意図的に訓練されることは少ない。そのような中での現況調査（傾聴ボランティア）であった。そのため、筆者らは学生たちに対し、事前に簡単な講義^{*4}を行った。

無論、すべての学生にとってこのような活動は初めてであり、初めて訪れた土地で傾聴を行うための信頼関係もままならない中、不安を抱えたスタートであった。そのような中で学生たちは「傾聴ボランティアの難しさを感じたと同時に、その必要性を感じた。自宅に戻って生活している人たちは、どこに悩みを相談したらいいかわからない（知らない）ようだった。もっと訪問して見守りや相談の必要があると思った。生活をしている方は、震災を受け止め、前に進もうと、前を見ようと頑張っていた。言葉の遣い方を間違えないように気を付けた。相手に気を遣わせたり、傷つけたり、深くいじくらないように傾聴しようと努力した」「やはり、高齢者の方々が多く見受けられた。人とかかわりがある方は悩みはあるものの元気に暮らしていて、人とかかわりが少ない（少なくなった）方は悩みが余計に深刻そうに感じた。人と話すことは大切な支援につながると感じた」

「『自分のところはまだマシだから、他の所に行ってあげて』と言われる方もいた。しかし、高齢で身体も思うように動かせず、不自由なのは確かだと思う。少しでも不安に感じるところがある人が遠慮なく援助を受けられるようになると思う」「今回伺ったところでは、身体の不自由なお母さんにケアを提供する施設が早めに見つかったり、ご自身の職も比較的順調に見つかったようだが、そのような人たちがばかりではないと思う。そのような方々がどのように生活を維持しているのかが気になった」「傾聴する中で、『津波が来ないようにして欲しい』と言われた時、何も言えなかった。みんな同じことを考えている。やり場のない想いを抱えていると思った」と述べている。このように、現況調査や傾聴に対し、ある程度の困難さを抱えながらも、学生なりに現状と被災者との関係性を解釈しながら言語化できたということは、その場で関係を作り、コミュニケーションを行うことが出来ていたと一定程度評価できるのではなかろうか。それだけでなく、被災者の方々の置かれた状況や心情に共感しながら、多様な価値観に触れられたことは対人援助職における教育的効果も併存したといえる。

なお、調査で得られたデータは各担当学生より調査票と共に復興支援ボランティアセンターのスタッフに口頭で引き継ぎがなされた。

5. 8月27日（土） 現地学生ボランティアとの交流・見守りサロン事業ボランティア

9:30 NPO法人ザ・ピープル

10:00~11:30 UGMメンバーとの懇談

11:30~12:30 昼食：被災者雇用による弁当



図3 移動販売における仮設店舗準備の様子



図4 現況調査の様子

事業の弁当

13:00～ いわき明星大学

13:00～13:30 講義：「いわき明星大学における被災地支援ボランティア活動」

講師：鎌田真理子氏

13:30～14:30 いわき明星大学学生との懇談

15:00～17:00 サロン事業運営ボランティア：小名浜地区岡小名雇用促進住宅

18:30 見学：久之浜地区復興花火大会

21:30 湯の岳山荘

22:00 れんげ国際ボランティア協会との打合せ

今回の活動では、ボランティアに参加した学生たちと同世代の高校生や大学生との交流プログラムも企画した。まずUGM (Unbidden Group Mates) との交流を行った。UGMは高校生と大学生を中心としたボランティア組織であり、今回の震災以降、いわき市を中心に様々な場面での活動を行っている。ここでは、グループワークを行い、率直な意見交換の場を設けた。意見交換のテーマは、①UGMメンバーのこれまでの活動報告、②地震直後の様子の語りや学生間の質問など、③震災前後における「いわき市（故郷）」の捉え方の変化、④長期的ビジョンでこれからの若者ができること、であった。いわき明星大学でもこれまでの活動についての説明がなされ、学生間交流が活発に行われた。

交流の中では、被災時（大学の図書館での被災）の動画を見せてくれる学生や、大学からの帰宅が困難になった状況、家族との連絡が取れなくなった時の不安などが語られ、共有化が行われた。2011年を表す漢字として「絆」が選ばれた⁴⁾

が、いみじくもそれらを象徴するような家族・友人・故郷との「絆」が学生間で語られた。参加していた現地の学生の中には、福島第一原子力発電所（東京電力）の1号機から4号機が立地している福島県双葉郡大熊町出身の学生もあり、震災後、家族と共にいわき市内での生活を余儀なくされている苦労や、故郷への想いが表出された。一方で、参加していた本学の学生の中には川内原子力発電所（九州電力）の1・2号機を抱える鹿児島県薩摩川内市出身の学生もあり、共感性高く話を拝聴し、自らの故郷に対する想いやこれから先の未来について真剣に語り合う様子が見えた。

交流プログラムを通しての学生の語りには「震災当日からの活動を聴いたり、これまでの活動を聴くと、同年代なのにすごく大人に見えた。自分の故郷の市や町に対する想いが強かった」「高齢者の方々の震災に対する語りとはまた違う側面を見ることができた。離れた地域にいる私たち若い世代の人たちに何ができるのか、もう一度考えてみようと思った。今回の交流で新たに分かったことを伝えていくことが今の私にできる確かなことだと改めて感じた」「（震災直後）事実ではないことで人が振り回されていたことが良くわかった。正しい知識と判断がパニックを抑えるカギになると思った」「ライフラインが停止した状況を考えた避難グッズ（防災用品）を日常から準備しておくことの大切さを感じた」など大規模震災を経験した同年代の学生たちの力強さや、今普通に生きていることへの感謝、これから先の未来に対する意識の変化が見られた有意義な時間であった。また、中には、「『放射線を受けているから』という理不尽な理由で結婚を決めていた人から断られたという話を聴いたとき、すごくショックを受けた。親戚が原爆にあった人と結婚しているが、やはり親に反対されたようだ。それと状況が変わらない。正しい知識を得なければ差別はなくなると言われていたが、まさにその通りだと思った」との語りから見られるように、原子力発電所からの被災が人々に与えた影響、そして、影響を受けたとされる人々の人格さえも踏みにじられる（／差別を受ける）状況をうかがう中で、

学生なりに今後の対応の在り方を模索している姿がうかがえた。

サロン事業の運営ボランティアは、開設したばかりの小名浜地区岡小名雇用促進住宅のサロン会場（集会所）で行われた。「サロン」と言えば、市町村の社会福祉協議会が協力し、地域住民等のボランティアが自主的に運営している「ふれあい・いきいきサロン」が著名である。これに倣い、被災地でも「孤立防止」「癒し」「生活の潤い」などをキーワードに、その必要性が高まっている。被災地での孤独について近田は「＜孤独な時間＞は過去の記憶を手繰り寄せ、失ったものを想い起させる。抑うつ的になったり、生きる気力そのものを奪ってゆく。孤立感を和らげるには、他者と繋がっているという感覚を保持することや、何かしらの役割を持つことで自己肯定感を保持し生きる力を取り戻すこと、生活し続けることで時が経つのを待ち、＜今＞をやり過ごすことが大切である」⁵⁾としている。このように、被災地における「こころのケア」が重視される中で、「孤独死」や「自殺予防」の観点からもこういった活動は必要になってくる。

警察庁によって発表されている「平成22年中における自殺の概要資料」⁶⁾によれば、2010年中にわが国で自殺した人の総数は31,690人にのぼる。そのうち無職者は18,673人と全体の58.9%を占める。さらに、原因・動機特定者における自殺の原因動機別の項目として挙げられているのは「家庭問題」「健康問題」「経済・生活問題」「勤務問題」「学校問題」などに分類されているが、こういった問題は被災地では特に起こりやすいのではないかと。震災により、家族や仕事、住居などに限らず、有形無形の多くのものを失った被災者にとって、このようなサロン事業は継続して行われる必要がある。

さて、学生たちは前日のうちにサロン事業に関する講義で学んだ事などをもとに、必要物品（サロンに参加する子ども達と遊ぶためのボールやシャボン玉セット、脳トレ、折り紙、クイズの本、大人のための塗り絵など）を検討の上購入し、当日に臨んだ。サロン会場につくと、雇用促進住宅にて呼びかけを行い、それらを媒介としな

がら参加者と交流を行った（図5）。

サロンに参加した子どもたちとはシャボン玉セットやボールを使い雇用促進住宅の中の空き地で遊んだ。「サロン事業で一緒に遊んだAちゃんのこと。祖父母が津波に流されて亡くなったとの事であった。『お空から見守ってくれてるから大丈夫』その言葉に胸が苦しくなった。キャッキヤといって遊んでいる子どもも、すごく深い傷が残っていることを実際に感じた。『また遊ぼうね。また来てね』の言葉に胸が苦しくなった」「子どもたちと遊んでいる時に、ある親子と話すことが出来た。放射線の影響などから外で遊ぶのも問題視されたりしているので、子どもたちの健全な成長に不安を抱えている様子であった」「ボランティアをしているというより、子どもたちと遊んだり、高齢者の方と話をしたり、折り紙をしたのは、一緒に楽しめた感じがした」など、この遊びの中でも、子どもたちの「自ら語りだす被災体験」に心と耳を傾けながら、ひと時を過ごした。

また、いわき市久之浜地区で行われた「奉奠祭花火大会」の見学を行った。この久之浜地区は地震とそれに伴う津波や火災により甚大な被害を受けた地域であった。当初のスケジュールにはなかったが、地域で行われる催しであり、なおかつ、復興の象徴として重要な意味をなす行事ということもあって、見学をさせていただくことになった。慣れない土地でのボランティア活動に加え、集団での自炊生活も重なり、学生たちにとっては束の間の休息になるとともに、素直にこの花火大会を楽しんでいた。ただし、それだけにとどまらず「この場所で何人もの人が亡くなっている。この町の人とはどんな思いで花火を見ていたのだろう。いわき市の住民にとって、また、私たちがのように外から来た者にとって、復興に向けて新たな気持ちで生きていく節目になったのではないかと思う。人って強いなと感じた」「数か月前まで人の家だったところに立って花火を見るというのは不思議な気分だった。屋台で料理を作っている人も花火を見に来ている人もすごく明るくて、もうみんな前に進んでいると思った。でも、道で前をまっすぐに見つめて一人泣いている女性を見

て、まだ終わってないと思った」といった感想を持っていた。こういった気遣いや気懸りを持つことが出来るようになったのも、この地域で一連の活動を経験する中で育まれた感覚がそうさせたのではなかろうか。



図5 サロン活動の様子

6. 8月28日(日) 主催ケアイベントの開催
8:00 NPO法人ザ・ピープル等によるチャリティバザーの準備ボランティア：いわきニュータウンセンタービル
9:00 主催ケアイベントの実施：中央台高久仮設住宅
13:00 チャリティバザー会場での薬草茶配布・イベント司会ボランティア
18:00 湯の岳山荘 着

7. 8月29日(月) 移動日
6:00 湯の岳山荘
7:15 いわき駅→東京駅→羽田空港
13:00 羽田空港発
14:55 熊本空港着

6日目はこのボランティア活動における実質的な最終日になった。この主催ケアイベント(薬草足湯・薬草茶の配布)のために、学生たちはいわき市に入る前に、熊本県玉名市にある「小岱山薬草の会」の協力の下、薬草(薬草足湯用として、アケビ・スイカズラ・ハチク・ヒノキ・ビワ・ヨモギ、薬草茶としてクズ・メナモミ・カキオドシ・エビスグサ・ヨモギ)の採取を行っていた。採取した薬草をケアイベント会場(いわき市中央台高久仮設住宅)にて煮出して使用した。

学生たちはケアイベントへの呼び込みから、足湯ケア・口腔ケアの提供にいたるまで積極的に活動を行った。足湯と同時に行われた口腔ケアでは、頭蓋仙骨療法を参考にしたリンパマッサージを取り入れ、頭部、頸部、背面部についてマッサージを行った。その後、業者より提供していただき持参した歯ブラシ(One step #80)を用い、歯磨きの方法や唾液腺マッサージ等を実施した(図6)。

これらのケアの終了後、イベント会場となった集会所に残られて談笑される方々に薬草茶が配布された。学生たちはこれらのケア活動で仮設住宅に入居する方々との言語的・身体的コミュニケーションを通して、「地域のコミュニケーションの大切さを感じた。仮設住宅に入居しても隣近所が誰だかわからなかったり、避難所から自宅へ帰ることが出来ても周囲に人が住めない状況だったり。物がそろっても精神的な部分で被災者の方には不安を抱えておられるのだと思った」「仮設住宅でケアイベントのチラシを配っているとき、『ほかの仮設住宅の人とは合わないから、行かない』と断られた。もっと簡単に受け入れてくれるものだと思っていたし、同じ地域なら仲間意識を持っていたり、互いに助け合おうという雰囲気があると思っていた。今回の震災が与えた影響は、テレビのニュースだけでは完全に伝わらないし、実際に見ることでしかわからないことがあると思う」など、多様な考察を深め「生活の再構築」の途上にある入居者の方々の「生活のしづらさ」に気付くことが出来ていた。



図6 ケアイベントの様子

IV. 管理的・教育的側面から見た被災地での学生ボランティア活動に関する一定の考察

1. 学生の態度や姿勢

7 日間の全日程にわたり、学生たちの態度は申し分なく、協力し合いながら活動を行っていた。被災地の現状や生の声から、常に「学ばせていただく」という姿勢が現れた態度を示していた。特に、宿舎での自炊・共同生活も役割分担をしながら懸命行っていた。こういった一連の日常生活活動の体験共有が一つの目的を持った集団を成熟させる要因にもなったと考えられる。

被災地での 7 日間を見ていて、参加した学生たちは本当に「人が好き」であるということを感じた。「学生だから」出来るボランティアがあった。ある程度の範囲においてであるが、自由かつ創造的に活動が行われてきたのである。そもそも、ボランティアの精神である「ボランタリズム＝voluntarism / voluntaryism」とは「精神的な自由と権力などの制圧に拘束されない自立を基盤とした精神であり、『一人ひとりが大切な存在として認め合える社会を創り出す』⁷⁾とされる。自らの意志で参加を表明し、被災地の方々に学び、試行錯誤しながら蓄積してきた学生ボランティアという立場での経験は、それぞれが専門職として災害支援を行うようになってからではできない(所属組織や専門性によるある種の拘束を受けるため)経験であり、経験によりその精神が涵養されたといえよう。そしてそれらの経験と精神は、保健医療福祉の専門職の根となり幹となる部分でもある。

2. ボランティアプログラムについて

プログラムに関しては、自炊・共同生活を考えるとかなり過密だったと考えられる。宿舎の状況や活動の振り返り時間、体験の共有化などの時間を考えると、夕方を早く切り上げるなど、今後継続活動を行う際の課題も明らかになった。7 日間の日程の途中で午前中もしくは午後の半日の休日があることが望ましい(例えば、集団から離れる時間・個人として行動できる時間)。さらに、現地のボランティアセンターに負荷をかけないため、現地の団体との直接的な打ち合わせや実際の

訪問箇所のチェックなどの事前視察は今後も必須である。

また、今回の活動は先に述べたとおり、「学ぶ機会」や「被災地における教育プログラムの側面」を考慮していた。その結果、プログラムメニューが豊富で多様な経験ができた反面、一つひとつのプログラムについて時間をかけて行うことが出来ない部分もあった。故に、学生は「慣れない状況」が日々継続された。今後、継続的に活動を行うことになれば、現地のニーズに応えつつ、すり合わせを行ったうえで、反復して経験できるプログラムを検討する必要がある。

3. 学生のメンタルヘルスケアに関して

被災地域の視察を行う中で、惨状を目の当たりにしたり、慣れない土地での生活に感情失禁する学生もいた。しかし、学生たちは努めて「笑い」を絶やさなかった。現地のボランティア実践者からの学びにも「自分たちがやれる範囲を行う。そして楽しみながらボランティアを行う」という一節があった。それでも、学生たち(引率教員も含めて)は「もっと何かしなければ」という感覚を持ち、引率者としてはペース配分に苦慮した。筆者の私的な感覚としては、当初は沈みがち(うつ傾向)だった気分が次第に高揚していき、最終的には躁傾向のまま活動を終え、帰着後もその後しばらくその感覚が継続された。ボランティアとは多少色彩が異なるが、精神保健福祉士として被災地支援活動を行った方々の報告^{※5)}の中でも、同様の情報が得られている。この報告者たちは「経験を多くの人に知ってもらふ(語り下ろす)ことで、自分の役割の一つの区切りにもなった」と述べる。学生たちも「振り返り、語りおろし、気づき、癒され、成長する」ステップが必要であるといえる。なお、廣江らは、災害ボランティアに関するバーンアウト防止に関する研修(水澤都加佐氏による研修)から以下の知見を得ている⁸⁾。ここに記しておくことで、今後の活動に生かしてほしい。

- ・自分の境界を設定し、過剰な責任を引き受けない
- ・周囲の問題に責任を持つのではなく、自分の

健康と幸福に責任を持つ

- ・自分の力で変えられるものと、変えられないものを見分ける
- ・自分の意志を表明したり、感情を表現する練習をする
- ・自分の価値は、周囲からの評価や仕事の能力によるのではなく、ありのままの自分に価値があることを確認する

4. 今後の継続的活動とボランティアの単位化をめぐる

参加した学生たちは口々に「1回の訪問活動で終わらせてはいけない。もう一度足を運ばなければ」と言う。また、「熊本に帰って身近な人にこの事を伝えることが私にできることのひとつだと思う」「(ボランティア活動を経験して)改めて自分にできること、しなければならないことを考えた。ボランティアは継続することが大切のように、私自身も今回だけに限らず、継続的に被災地について考え、何度も支援活動に参加したいと思う」と語る学生もいた。現地の復興のプロセスを実際に観察しながら、そのプロセスの中で自分たちに何ができるのか考えていき(考え続ける)、それを実行し続ける事にこのボランティアの最大の意味があると考えた。先にも述べたような被災地支援を行った専門職が体験を語り下ろす機会を得たように、学生たちもそういう機会を得ることが出来た^{※6}。そういった機会をも含めた一連の活動として位置付けて学生の成長を追っていく必要がある。

さらに、学生・教員だけでなく、職員も参加するなど大学全体が一体となった継続的関与につながればと思う。大学という企業の社会貢献としての価値だけでなく、教員の教育研究活動の広がりや職員のキャリアアップにもつながると考えられる。

他方、文部科学省の後押し^{※7}もあり、一部の大学ではボランティア活動を「単位化」したり、既存の座学の科目の一部に充てるなどして教育活動の一環としているところもある。ボランティア活動は人としての成長を大きく加速させる。それであるならば、単位として認めてカリキュラムに位置付けることも、本学の理念や教育方針とも照

らし合わせると合致する部分が多い。ただし、この件について単位として認めることになれば、参加する学生は自発的な意味合いを尊重される「ボランティア活動」としての側面と「卒業のための評価される科目履修」という二重の価値を抱えながら活動を行うことになる。なおかつ、大学としてはボランティアを評価することの困難さ^{※8}に向き合い、その「評価の基準(／ミニマム・スタンダード)」を持ち合わせていかねばならない。筆者自身も、本論の中でボランティアに参加した学生達の成長は確信しているものの、その客観的「程度」に関して定かなものは持ち合わせていない。今後、ボランティアの単位化をめぐることは、それをどのように設定していくのかを考えながら慎重に判断していく必要がある。

結語

以上、本学における東日本大震災学生ボランティア活動の実際とその内面的成長に焦点を当てた小括、管理的・教育的側面から見た今後の課題を提起してきた。

震災により、被災者の方々の多くは「生活の再構築」を余儀なくされている。地域が崩壊し、それまで培ってきた文化や関係性までも再構築する必要性を迫られた、非常にエネルギーを要する営みである。近年、social exclusion(社会的排除)の対峙概念として用いられることの多くなったsocial inclusion(社会的包摂)について、園田は「それは、経済的貧困とか、格差、分裂、あるいは身体的・精神的病苦とか障害とかいった次元の問題だけではない、社会関係や結びつきの弱体化や喪失に光を当て、さらにはそれを乗り越え、包み込むことを志向するという、社会福祉にとっても基本となる課題を示している」⁹⁾とする。このsocial inclusion(社会的包摂)が一つの指標となり、対人援助職であるなしを問わず、様々な人々や文化が有機的に被災地で絡み合う姿を誰もが望んでいる。そして、われわれはその生活の再構築のプロセスから多くのことを学び、社会について、国家について考えていかなければならない。

6mの津波に飲み込まれた地区で、蟬の鳴き声

が聞こえた。被災地の復興に取り組む人や自然の強さ、そして「しなやかさ」を感じさせられた 1 週間だった。

謝辞

学生ボランティア活動を行うにあたっては、NPO 法人れんげ国際ボランティア協会の久家誠司事務局長、NPO 法人ザ・ピープル理事長兼いわき市小名浜地区復興支援ボランティアセンター長の吉田恵美子氏、いわき明星大学人文学部現代社会学科主任の鎌田真理子教授、平スカイストア（いわきいきいき食彩館委員会）代表の松崎康弘氏、同行取材をしていただいた熊本日日新聞社会部記者の隅川俊彦氏、その他多くの方々のご協力を頂きました。記して感謝申し上げます。また、何よりも、学生達を受け入れ、内面的成長を後押ししてくださった、被災地の方々に心より御礼申し上げます。

震災によりお亡くなりになられた多くの方々のご冥福と、被災地の日も早い復興を心よりお祈り申し上げます。

注

※1 佐藤はこの「支援者支援」について「外部からの支援者には、対象者に対して現地の精神保健福祉士と同じかわりをすることはできない。したがって、現地職員には本人にしかできない業務に専念してもらい、外部の支援者は、可能な範囲で業務を代行したり、情報収集・発信等の周辺業務を担うというような役割分担が生まれてきたのである」と述べている。（佐藤三四郎、災害支援と精神保健福祉士、精神保健福祉、2011；vol.42.No.1：5）

※2 生活時間（ライフ・コース）は①「個人的時間」（ライフ・ストーリー）、②「社会的時間」（家族、地域などの帰属集団固有のライフ・イベント）、③「歴史的時間」（出生コーホート固有の体験、特性）の3つの次元の複合として把握される。

（Germain, C.B. and Gittermann, A. *The Life Model of Social Work Practice*, 2nd Ed., Colombia University Press. 1996. pp.9-14.）

※3 村田は「気遣い」と「気懸り」の二面性と

関係性について、「ケア概念の構造は、何より人間存在がケア（Care）であるということ、言い換えると『気遣い』であると同時に『気懸り』なのだという二面性に規定されている。それは誰もが自己においては気懸りと憂慮に満ちてはいるが、しかしまた他方、その本性において他者への気遣いを欠かせないという事実で明白にあらわれている。そしてなにより、われわれが他者への理解と共感を示すことが出来るのは、このケア（Care）である人間存在が『気遣いと気懸り』という二面性を持っているということに根拠があるのではないだろうか。—＜中略＞—ケア概念はそれゆえ、関係概念であるといえる。つまり関係を基礎とし、関係の力を使って相手の思い・願い・価値観が変わるのを支えるという他者とのかかわりの中でこそ、その存在が成立しているのである」と説明している。（村田久行、改訂増補 ケアの思想と対人援助—終末期医療と福祉の現場から—、東京：川島書店；1998、p67）

※4 例えば、「聴く（listen）」という概念をめぐって、聞く（hear）や問う（ask）との違いから解説を行った。さらに、山辺の「面接における基本的応答技法」を参考にしながら①内容の反射、②感情の反射、③適切な質問（開いた質問や閉じた質問など）、④情緒的な支持、⑤直接的なメッセージの伝達、について具体的な応答例を示しながら解説を行った。（山辺朗子、社会福祉援助技術演習②個人とのソーシャルワーク、京都：ミネルヴァ書房；2003、p70）

※5 熊本県精神保健福祉士協会第37回研修会（2011年12月3日 於：熊本学園大学）シンポジウム「東日本大震災の被災地支援活動を通して」より。

<シンポジスト>

国立病院機構菊池病院 常増健二氏

福祉ホーム B 型 サンビレッジ 中村桂子氏
桜が丘病院 大瀧高昭氏

<コーディネーター>

九州看護福祉大学 茶屋道拓哉

※6 本学学園祭（2011年10月22日）における「東日本大震災救援ボランティア活動報告会」や「阿蘇やまびこふれあいフェスタ（主催：阿蘇

ブロック社会福祉協議会連合会)」(2011 年 11 月 5 日)におけるパネル展示・報告。

※7 文部科学省「東北地方太平洋沖地震に伴う学生のボランティア活動について(通知):23 文科高第 7 号」(平成 23 年 4 月 1 日)においては、ボランティア活動のための修学上の配慮として「各大学等の判断により、ボランティア活動が授業の目的と密接に関わる場合は、ボランティア活動の実践を実習・演習等の授業の一環として位置付け、単位を付与することができる」としている。

※8 例えば、石井は「ボランティアは自らの発意で活動を行うため、他者がその真意を理解することや活動内容を評価することは難しい。そのためボランティアは時折自分自身の活動を振り返り、自分の活動スタイルを他者に強いていないか、相手の立場に立って考えることを怠っていないかなど、活動の意味や内容について検証することが必要である」としている。(石井祐理子, 10-2 ボランティア, 日本地域福祉学会編, 新版 地域福祉辞典, 東京:中央法規;2006, p271)

文献

- 1) 警察庁緊急災害警備本部, 平成 23 年東北地方太平洋沖地震の被害状況と警察措置(広報資料)平成 23 年 12 月 13 日, 2011;1,
- 2) 総務省統計局, 平成 22 年国勢調査 人口速報集計結果 全国・都道府県・市町村別人口及び世帯数 結果の概要,
- 3) 福島県災害対策本部, 平成 23 年東北地方太平洋沖地震による被害状況即報(第 454 報)平成 23 年 12 月 13 日(火)8 時 00 分現在, 2011;1-4,
- 4) 財団法人日本漢字能力検定協会, 2011;
http://www.kanken.or.jp/years_kanji/
- 5) 近田真美子, <こころのケア>とは何か—ケアチームでの活動を通じて考えたこと—, 精神医療, 2011;no.64:121,
- 6) 警察庁生活安全局生活安全企画課, 平成 22 年中における自殺の概要資料, 2011;1-26,
- 7) 石井祐理子, 10-2 ボランティア, 日本地域福祉学会編, 新版 地域福祉辞典, 東京:中央法規;2006, p271,
- 8) 廣江仁・山内玄太郎, 災害ボランティアマニュアルと支援者のセルフケア, 精神保健福祉, 2005;vol.36.No.4:361,
- 9) 園田恭一, 第 4 章 地域福祉計画とコミュニティ、そしてソーシャル・インクルージョン, 園田恭一・西村昌記, ソーシャル・インクルージョンの社会福祉—新しいくつなぎを求めて—, 京都:ミネルヴァ書房;2008, p84

【資料】 学生代表感想文

震災ボランティアに参加して

東日本大震災救援学生ボランティア

学生代表 看護学科 200810061 白地美希

2011（平成23）年8月23日から8月29日の日程で、筆者らは東日本大震災ボランティアとして福島県いわき市に行った。現地では、いわき市小名浜地区復興支援ボランティアセンターのコーディネートにより、実質5日間で現地視察、傾聴ボランティア、ケアイベント、サロン事業、移動販売の手伝いなどを行った。他にも、いわき市でボランティア活動に取り組んでいる学生団体UGMや、いわき明星大学の学生たちとの交流会も行われた。

現地視察はいわき市の海岸沿いを北上しながら行った。想像していた瓦礫の山などはすでに撤去されていたが、波打つ道路や壊れた倉庫、泥だらけの校舎、解体待ちの住家など、まだたくさん震災の爪痕は残っていた。

津波の被害を目の当たりにし、筆者らに何が出来るとのだろうと考えるなか、次の日に行われたのが「傾聴ボランティア」であった。困っていることや必要なものがないかを一軒一軒聞いて回り、その家や地区のニーズが何なのかを調査していった。全く知らない家を訪問するということはとても緊張することであった。しかし、優しい方々ばかりで、中には飲み物やお菓子などを出して下さることもあった。少しでも皆さんの力になれるようにという思いで行っていたが、みなさんの元気で前向きに取り組まれている姿を見ると、逆に筆者らが元気をもらっていた。

元気な姿というと、最終日に行われたケアイベントでもたくさんの笑顔に触れることができた。仮設住宅の一画で行われたケアイベントでは、福島県に出発する数日前に筆者ら自身が摘んできた薬草で作った「薬草茶」を振る舞い、薬草を煮出した「足湯」に浸かってもらい、更にマッサージや口腔ケア指導を行った。最終日ということもあ

りメンバー全員に疲れがみえていたが、みなさんの「ありがとう」の言葉や笑顔が何より嬉しく、楽しみながら行うことができ、成功という形で終わることができた。

5日間の活動の中でたくさんの方との出会いがあった。その中でいわき市の住民の強さを感じた。前向きに復興に向けて取り組まれている姿に筆者らが元気づけられるということも何度もあった。みなさんと出会えたおかげで筆者ら自身成長した部分がたくさんある。そんないわき市の方々と、一度だけではなく、二度三度と関わっていきたいと心から思っている。また、筆者にとって一緒にボランティア活動を行ってきた仲間との出会いもとても大きいものであり、仲間のおかげで1週間を本当に楽しく過ごすことが出来たと思う。

ボランティアを終えこれからの筆者らに出来ることは、様々な活動の中で見てきたこと感じたことを伝えていき、少しでも震災に関する事に興味を持ってもらうことだと考える。筆者自身、今回参加してから、震災に関するニュースについて、より興味を持つようになった。興味を持つことで、3.11の出来事を忘れず、そしてまだ苦しんでいる人がたくさんいるということを忘れないことが大切なのではないかなと思う。

最後に、この東日本大震災で犠牲になられた方々に哀悼の意を表すとともに、被災地の一日も早い復興をお祈り申し上げます。